

夏樹静子

旅人たちの迷路





文春文庫

旅人たちの迷路

定価はカバーに
表示してあります

1988年3月10日 第1刷

1991年3月25日 第2刷

著 者 夏樹静子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-718412-5

文 春 文 庫

旅人たちの迷路

夏樹 静子

文 藝 春 秋

旅人たちの迷路／目次

第一話 焼きつくす

第二話 現場^イ存在^ル証明^バ

死と法医学——解説に代えて 柳田純一

旅人たちの迷路

第一話 焼きつくす

1

東京都二十三区内でも、杉並、練馬、北区などの外れには、まだ広い畑や疎林そりんが横たわり、人家もまばらな、いわゆる武蔵野の面影を留める区域が随所に残っている。

そうした土地のあちらこちらに、四方を高さ三メートル余りのトタン堀べいで目隠しされた、ちよつと異様な一画が見受けられることがある。堀の内側は千平方メートルくらいから、広いところでは一万平方メートル近くもある。中で何が行われているのかといえ、自動車、機械、家庭電機製品などのすつかり老朽化したものが、自動車修理工場やゴミの回収業者らのトラックで毎日運びこまれ、作業員たちが解体や焼却に当っている。そうしてできたスクラップは、また別の業者が買い取って、運び出していく。いわばそこは、大都会で生み出されるあらゆる金属製品の墓場であり、また、資源リサイクルのターニングポイントともいえるかもしれない。

練馬区土支田どしたの、こんもりとした丘陵地の北側にも、そうした解体場の一つがあった。周囲

はほとんど畑と林で、林の向うに道路、その先には都立の動物墓地があるという物寂しい環境である。

三月八日木曜日、朝七時四十五分頃、解体場の主任がいつものように出勤してきた。昔は中の事務所で誰かが寝泊りしていたが、最近是人件費が高くつくので、宿直がなくなった。仕事は八時から始まるが、五十すぎの主任は毎朝その十五分くらい前に出勤していた。

彼は自分の古い車を塀の外の空地に駐め、解体場の出入口に歩み寄った。今年の冬は長いうす青い空がひろがって、今日は好い天気になりそうだが、まだ朝夕の冷え込みはきびしく、吐く息がかすかに白くなる。

トタン塀の一箇所に、やはりトタンで両開きの戸が作られている。戸には南京錠が付いているが、ぶらさがっているというだけで、もう長らく施錠されたことはなかった。たとえ空巢に入られたところで、盗まれるようなものは何もないのである。

彼は戸を広く押し開けた。

中には、自動車や機械類の錆びた残骸が山と積まれている。

事務所のほうへ歩きかけた彼は、ふと足を止めて、目を凝らした。スクラップの山のいちばん手前に、もうほとんど鉄骨だけになったような車が向うむきに置かれていたが、そのトラックのあたりから、うっすらと煙がたちのぼっているのに気が付いたのだ。彼は一瞬、昨日焼却した車がまだ焼け残っていたのかと思ったが、そこで車を燃やすことはないし、その車はすで

にそうした処理を終ったものだった。

近付くにつれ、あたりにはまだ熱気が漂い、それに何か嫌な臭いが鼻腔をついた。オレンジ色の灯油のポリケースらしいものが地面に転がっているのが目に入ったが、彼はまず車のほうへ歩み寄った。心臓がなにやら不穏な動悸をうち始めている。

車のトランクは三分の二くらい開いた状態で、内部が真黒に焼けただれている。中で何かが燃やされたらしい。

彼は鼻と口を掌で塞いで、おそるおそるトランクの中を覗きこんだ。黒々と焦げた物体が、まだかすかな煙をあげている。丸い部分や、くびれてねじ曲ったようなところ、奇妙な棒みたいなものの先はまるで黒い骸骨の手のように枝分れして……まさかこれは……いや、もしかして、人間の身体ではないだろうか？

彼は異臭のこもる空気をまともに吸いこみながら、しばらくは口をあけて喘いでいた。

2

警視庁捜査一課・特殊犯捜査係に属する巡査部長の遠山怜子が、上司の警部補らと共に現場に到着したのは、その朝九時少しすぎだった。八時二十分頃彼女が桜田門の本庁へ出勤した直後に、係長から現場への出勤を命じられた。練馬区土支田で、スクラップにされた車のトラン

クから黒焦げ死体が見つかったという連絡は、所轄しよかつの石神井署しやくじんじよを通して本庁へ伝えられた。最初の通報は、車のあった解体場の主任が最寄りの派出所へ電話したものである。

捜査一課の一行が着いた時、解体場の出入口にはすでに現場保存の縄が張られ、石神井署の刑事課員らが十名余りも集まっていた。寂しい場所なので野次馬は割に少いが、それでも付近の住民や通勤途上のサラリーマンなどが、縄の外から固唾かたずをのんで見守っている。

問題の車は、解体場の出入口から十メートルくらい奥の、スクラップの山のいちばん外側に置かれたものである。

三分の二ほど蓋ふたが開いたトランクの中で、小柄な人間が頭を左にして横向きに寝かされ、そのまま丸焼きにされたような状態だった。警部補のあとから近寄った怜子は、思わず足がすくみ、両手で口を押さえて横を向いた。彼女は今年二十六歳、特殊犯捜査係に配属されて間もなく一年になるが、殺人現場に臨場した経験がまだ三回くらいで、ましてこんなむごたらしい死体は見たこともなかった。

彼女はけんめいに自分を落着かせて、無理矢理、車のほうへ視線を引き戻した。

死体は全体にちぢこまり、ほとんど炭化しているようなので、小柄に見えるのかもしれない。首や手足がおそろしい形にねじ曲って、火炎のすさまじさを物語っていた。その時この人はすでに死んでいたのだろうか。それとも生きたまま――？

怜子はまた膝が震えた。

「昨日の夕方五時にここの作業員が引揚げる時、この車のトランクはおよそ閉まっていたそうです。それが、今朝来た時には、これだけ開いて、黒焦げ死体があったということなんです」

石神井警察署の捜査員が、特殊犯捜査係主任の生田^{いくた}警部補に説明を始めた。

「火はすっかり消えていたわけですね」

「ええ、でもまだくすぶって、煙をあげていたそうですが」

「うむ……」

特殊犯捜査係の中でも、とくに火災犯罪を専門に研究している生田は、注意力を集中した眼^{まなこ}差^さで、死体とその周辺を観察している。その目が、車から三メートル余り離れた地面に横倒しになっている灯油のポリケースを捉^{とら}えた。

「あれは？」

「作業員が来た時からあの状態で置かれていたそうですが、ここのものではないということ……中は空^{から}です」

生田はオレンジ色のポリケースのそばへ寄って屈^{かが}み、蓋のあいている口へ顔を近付けた。

「やはり灯油ですね」

呟^{つぶや}いて、彼は再び車のそばへ戻ってきた。

「人体やトランクの中に灯油を撒^まいて、火をつけたものでしょう。火勢の強さから推^おして、相当量の灯油を使ったことが想像されるが……」

彼ははじめて、慎重に意見を吐いた。

本庁からは鑑識課員も出勤していたが、彼らは死体にいっさい手を触れず、それを取り囲んで待機の態勢をとっている。

生田や怜子たちより十分ほど遅れて、またサイレンを鳴らして車が到着した。

後部座席から降りたった、背広の袖に腕章を巻いた男が、急ぎ足で縄の内側へ入ってきた。身長一六五センチくらいの小柄で痩せ型、半白の髪に目尻の下った好人物そうな顔立ち。そろって屈強な体格の捜査員たちの中に混ると、いささか貧相にさえ見えるが、彼が着いた途端に現場の雰囲気はそれを待っていたような、いっそうの緊張に包まれた。死体のそばにいた鑑識課員が、彼のために場所をあけた。

「ご苦労さまです」

「どうも」

彼は生田たちと短い挨拶を交すと、唇を引き結び、目を凝らして、異様な黒焦げ死体に見入った。

その人物は——北坂満平、今年四十五歳になる警視庁嘱託医である。警視庁には現在、嘱託医が二人いて、特捜本部がつくられそうな難事件が都内で発生し、変死体が発見された場合、先に連絡がとれたほうへ、警視庁から車が迎えに行く。北坂は都内の大学の法医学助教授だが、今朝はまだ目黒の自宅にいたところへ、鑑識課長から電話で事件を知らされ、現場へ急行する

ように要請された。

一方、事件現場では、囑託医が着くまで、死体には誰も手を触れられない。発見された時の状態のまま、彼の検屍を待つのである。北坂は、まだかすかに熱気を孕み、異臭を放っている死体へ、近々と顔を寄せ、頭の方から足の先まで、充分な時間をかけて検めた。真黒になった骨にそっと手をかけて、下側を覗きこむこともした。

「これはまた、徹底的に焼かれてますなあ」

それが彼の発した最初の感想であった。

「性別や年齢などは推定できますか」

生田が待ちかねたように質問する。

「この頭蓋骨の感じなんかからして、女のような気もしますが……はつきりしたことはいえませんね」

「年齢は？」

「いやあ、わかりませんねえ」

「灯油をかけて火をつけられた時、すでに死体になっていたかどうかといった点は……？」

「とても無理ですねえ、ここでそれを決めようというのは」

北坂は心底さっぱりわからないというふうに首を傾げている。場合によっては、それはどこかユーモラスにも響く口調だった。が、こうした現場ではふつう、死因と死後経過時間、身元